

支部だより

亀山学長を迎えて、モスクワ外語会を開催

佐瀬瞭夫 (R 昭 29)

2008年10月26日、“現代日本で何故ドストエフスキーは甦ったのか？”というテーマを掲げてモスクワで講演と会談を行った亀山学長を迎えてレストラン“一番星”で同窓会を行いました。原卓也前学長以来3代を経て又露語卒学長が就任されたという事と併せて学内における露語の勢力が一段と増強したと言う認識が一致大いに盛り上がりました。

亀山学長は其の直後11月4日にメドベージェフ大統領よりプーシキン文化勲章を授与された事をご存知の通りで、益々名声が上がった事は我々同窓生の誇りとするところです。今回は卒業生56名中27名が出席しました。大半は露語卒ですが、他にインドネシア、インドパキスタン科卒業生も3名加わりました。外語同窓会は1984年ソ連時代から正式に行われるようになり、原則的には毎年1回又は今回のように何かイベントがある度に集まっていますが、どういう訳か当時から現在に至るまで卒業生の数は毎年50名前後と現在まで殆ど変わりません。2004年には露語の古茶先輩と外語ツアーの方々が来られ一夕懇親会を持ちました。

ソ連時代は卒業生の殆どが商社とプレス関係でしたが、現在は日ロ関係企業団体の数が増え、モスクワ日本ビジネスクラブ加入社が170社を超える盛況となり、これに伴って卒業生も大使館、メーカー、銀行、運輸、損保関係者が増えています。又、これら企業の中で露語科以外の語学部の卒業生も増えています。その他にロシアの各大学での外国人学生の受け入れ枠が増え、相当数の外語卒業生が自分の語学力に磨きをかける為に再勉強している現状です。その他出張者も含めモスクワ滞在日本人の数も常に2000名を超えています。全世界の各都市で外語会が開かれているようですが、モスクワで常

に50数名と言う数は相当多く、当地での一大勢力と看做されています。北方領土と平和条約の問題が解決すれば駐在員の数も更に増えると思われれます。一方、日本人ツーリストの数は伸び悩みで、この原因の一つにホテル代の高騰と世界でもトップクラスの物価高とされていますが、これは皮相的な観方で、安く生活しようと思えば幾らでも安く上がります。例えば、地下鉄は東京と変わらぬ総延長距離がありますが、乗り放題で日本円で80円という安さです。又、ここ4-5年位の間に外環状線沿いの5-6箇所に出た超大型スーパーマーケット群が先ず初めての、又は数年ぶりにモスクワを訪れる日本人の度肝を抜き、一般大衆は其処で食料品や生活用品を安く買っています。一般大衆の3割が郊外にダーチャと称する小型別荘を持っており、夏場の週末は自家用車でダーチャに行き、其処で野菜を栽培して過ごすのが最大の楽しみとなっています。一方、国内自動車産業は大幅に遅れており、街を走っている乗用車も大半は日本、ドイツ、アメリカ、韓国、フランスからの輸入又は現地組立です。ごく平均的なサラリーマンでも輸入新車を乗り回せるのは、3-4年という長期ローン(但し金利は20%以上)で返済するまでは所有権はローン会社にあり、其処から委任状を貰って運転するというシステムになっているからです。保険料も強制対人賠償保険金額は16万ルーブル(70万円)で保険料は1万3千円という、信じられないような人間の命の安さです。それでもソ連時代は一般人には保険という認識が無く、人身事故の被害者は泣き寝入りといった状況に較べれば大分進歩したと言えるでしょう。

又、輸入中古車の数も相当なもので2007年日本からの中古車の数は40万台です。世界でもトップクラスの資源大国である一方では、斯様にまだまだロシアの近代化はちぐはぐで、然しその故に未開の大マーケットと言われているわけです。このレポートを書いている数日前に世

界同時金融危機という衝撃的な事態が発生し、ロシアも株式大暴落、2回の市場閉鎖という事態になり、ペレストロイカ、1998年のバブル崩壊に続きロシアがどうこれを乗り切るかメドベージェフ、プーチンの双頭の鷲指導者の腕の見せ所となってきました。我々駐在員にとっても眼が離せません。(東京外語会モスクワ支部名誉会長)



東京外語会フランクフルト

青木久恵 (D平3)

フランクフルト支部では2008年12月5日(金)にフランクフルト市内のレストランにて懇親会を開催しました。クリスマスシーズンや年末を控え皆様お忙しい中、2名の新会員を含め計12名の会員にご参加いただきました。今回はゲストとして日本よりご来独中の古川信孝さん(D昭32)のご臨席を仰ぎ日本のお話などをお伺いしました。掲載の集合写真も古川さんにご提供いただいたものです。懇親会では新メンバーの自己紹介や旧知の会員の近況などが紹介され、また、マンドリン演奏家の越智敬さん(I昭34)からはギタリスト、ナルシソ・イエペスと共演したギターとマンドリンの協奏曲などを収録したCDのご紹介がありました。フランクフルト支部用にCDも頂戴しました。会場の都合で当日は曲を拝聴できなかったのは残念なことでした。

また、今回の会合では幹事の交代が満場一致で承認されました。新幹事は山本真由美さん(D昭58)です。また幹事一人ではなにかと負担が大きいため副幹事も置かれることになり、帆刈奈穂子さん(D昭57)にお引き受けいただきました。フランクフルト近郊にお住まいの東京外

語大学卒業生でまだ支部に登録されていない方がおられましたら、ぜひご連絡ください。



ロサンゼルス外語会便り

山口憲和(C平2)

ロサンゼルス支部は2009年の初会合を1月25日(日)のランチタイムに、中華料理レストラン SEA EMPRESS (海皇)にて開催いたしました。ロサンゼルス支部の会員は、現在19名。会長は昨年より堀川照一氏(C昭50)にお願いしています。今回の新年会は、昨年より新会員として加わったJohn 望月氏(Po昭26)や、昨年末にオランダより再びロサンゼルスに戻られた元ロサンゼルス支部会長の宮田慎也氏(V昭45)も参加され、にぎやかな会合となりました。ロサンゼルス支部の特徴は、皆さんご夫婦で外語会に参加されることが多く、会員数は少なくとも今回の外語会も16名が参加。もともとご主人が外語会員の奥様が、ご主人が亡くなった後も参加されて皆さんと交流をされていたりします。会員名簿を見ますと、昭和20年代卒業の方が2名、昭和30年代卒業の方が2名、昭和40年代卒業の方が最も多く6名と、会員の方もリタイアされた方が多くなってきています。(平成卒業の会員は5名ですが、もっと平成会員も増やして行きたいと思っています!) 米国はここ数年医療費の高騰と医療保険費の上昇が激しく、新年会でも医療の話題も出て参りました。健康状態によって最後まで米国に残るか、それとも日本に帰国するかを考えるとという選択を迫られるほど、医療費の問題は大きくなってきています。昨年のリーマンブラザーズの破綻から一挙に押し寄せた不況で、身の回りの小売店もクローズするところが多くなってきていますが、一方でオバマ大統領の登場で、そ

の改革の方向に米国に住んでいるわれわれも期待をしています。医療の問題もオバマ大統領の上げた課題の一つになっていますね。新年会の日は、いつものロサンゼルス日中で、明るい太陽が輝いていました。中華レストランも旧正月と重なって大賑わい。世間の不況の話もどこ吹く風で、明るい会合となりました。ロサンゼルスの明るさを日本を始め、世界の外語会の方におすそ分けできればと思い、写真を撮らせていただきました。2009年も会員の皆さんがご健康で、益々活躍されることをお祈りしております。



東京外語会 N Y 支部

長谷川潔(Th 昭 46)

外語会の今年最初の会合は1月30日に17人の参加を得て、にぎやかで和やかな会となりました。前회가7人だったことを考えると大盛況といえます。07年夏に望月前支部長から引き継いだ会員数は実質9人でしたが、現在25人に増えています。地元の無料邦字紙に広告を3回掲載したのが良い結果を生みました。NYだから30人ぐらいの規模であってもおかしくないと思いますが、次の会合に伴う宣伝で実現するかなと期待しています。



N Y 東京外語会、丹羽、岡田両先生迎え「国際戦略」で懇談

長谷川潔(Th 昭 46)

寒波が到来し雪景色となった3月初めのNYに、母校の東京外国語大学から丹羽泉教授、岡田昭人准教授のお二人が来訪された。NY東京外語会は3月4日夕に8人が参加して両先生を囲む会を開き、母校が進めようとしている国際戦略や大学の近況について聴き、意見交換をした。まず夕食懇談を前に「外語大の国際学術戦略」を巡るミーティングを日経アメリカ社の会議室を借りて開いた。両先生から東京外語大がアジア・アフリカ研究のために結成している英、仏、蘭、シンガポールの4カ国の大学とのコンソーシアムを米国の有力大にも広げる計画の概要や、こうした大学との間で研究者や留学生の交流を拡大、在外卒業生を加えて「グローバル・コミュニティ」を形成していく考えを伺った。

背景には、母校が独立行政法人となり、少子化の進展を受けて今後予想される大学再編の波を乗り切っていくには、国際ネットワークの強化をテコに大学としての競争力と魅力を増していくことが不可欠という判断がある。

NY東京外語会としても側面支援できることはしていきたい。例えば、大学からの派遣研究者や留学生などを外語会の催しに来てもらったり、種々の相談に乗ったりすることはできるだろう。そうした協力をするにあたって、NY東京外語会の会員は「TUFS(東外大)アソシエーツ」の認証状をもらうという。続いて、近くのニッポン・クラブに会場を移し、夕食を取りながら懇談。両先生から母校が近接する国際基督教大学との交流を深めているなど最近の話聞きつつ、外語会会員からも「新聞に大きく報じられた東工大、一橋大などとの連携話はその後どうなったのか」「英語による授業はあるのか」といった質問が相次いだ。参加したOB、OGたちの卒業年次は1970年代から2000年代まで分散しているが、変わりゆく外語大に「へえー」と驚く人も少なくなかった。この日の夕食会には、NYの日本語無料紙ジャピオンの取材が入った。同紙は4月から「同窓会めぐり」シリーズの掲

載を始めるという。NY 外語会の格好の PR になり、会員増加に寄与すると考え、取材の申し入れを受け入れた。参加者一人一人が「大学時代に一番印象に残っているものは?」「あなたの考える外大気質とは?」といった質問を受けていた。



外語会モンリオール支部

阿部正宏 (E 平 4)

平成 16 年 7 月 12 日に発足しました当支部ですが、メンバーの数もあまり変わらないまま(現在名簿上で 8 名)、ここまでやってくることができました。これも、当地モンリオールで支え続けてくださった方々、支部の存続のために、モンリオールを離れた後も名簿に名前を残して下さっている方々、そして何かと励まして下さった外語会の皆様のおかげであり、たいへんありがたいことです。仏系・英系カナダ人に加えて世界各地からやってきた移民人口が激増している国際都市のモンリオールに倣ったわけではありませんが、当支部の会員の出身は、ロシア語、フランス語、英語が 2 名ずつで、あとはドイツ語、インド・パキスタンとばらけており、卒業年次も様々ですが、強いていえば西ヶ原キャンパスの経験者が多いようです。そのような訳で、たまの会合(食事会)などがあると当然昔の話になるのですが、今あの辺りはどうなっているのでしょうか、或いは、府中キャンパスはどのようなところなのでしょうかとというような話題もです。

いずれにせよ、今勉強されている方々にはがんばっていただきたいです。残念ながら、会員同士の都合がつかず、企画はあっても実施にまで至らないことが多いため、結果的に活動が停滞してしまっているのが現状なのですが、外語大を縁として折角出来たつながりは大切に保ちつつ、支部として新たな活動展開・組織拡充の

機会を窺っているところです。昨年末には、新しい会員の方が加わっていただきました。この頃は日も長くなり、暗く寒かった当地の冬もようやく終わりの兆しが見えてきました。そのようなモンリオール支部ですが、今年は発足 5 周年を迎えることとなります。角田会長の下、今後とも「存続」を第一目標にがんばっていく所存ですので、どうぞ宜しくお願いします。外語会の皆様には、お体を大切にされますよう、そして、当地にお立ち寄りの際には是非ご一報いただけますよう、どうぞよろしくお祈りします。

長野支部総会開かれる

岩下隆 (C 昭 45)

長野県内には、約 150 名の外語卒業生がおります。長野オリンピックを前にした 1997 年に支部が結成されました。1998 年からは 2 年ごとに、長野と松本で交互に支部総会や公開講演会などが開かれてきました。第 7 回総会は平成 20 年 11 月 29 日、松本城の近くの料亭「桜家」で開かれました。県内各地から 21 名が参加し、和やかな雰囲気の中で総会と懇親会が行われました。

開会に先立ち、秋の叙勲で旭日中綬賞を贈られた塩沢鴻一支部長 (D 昭 24) に、お祝いの花束が贈呈されました(塩沢氏は SBC 信越放送社長・会長・日本民間放送連盟副会長を歴任。長野支部結成に尽力され、以来支部長を 11 年間務められました)。議事では活動報告・会計報告が承認され、活動方針の中では 2010 年に第 8 回総会を長野市で開くこと、また本部会費未納者を減らすよう協力することが決定されました。役員改選では、塩沢支部長から勇退表明があり、新支部長に市川嘉章氏 (E 昭 31) 氏が、また幹事の補充では中村文孝さん (D 昭 39)、伊沢紘樹さん (R 昭 46) が新たに選出されました。続いて御代田町に転住され、今回初めて参加された柴田寛二さん (S 昭 34 元毎日新聞記者) をはじめ 4 名の方の紹介がありました。懇親会では、最長老の伊藤芳之さん (C 昭 18 元飯田市議) の元気なお声での乾杯の音頭がありました。酒間には外語時代の思い出話に花が咲き、世界各地で

の体験や、近況報告などで盛り上がり、大変楽しいひと時を過ごしました。



中部支部 総会・懇談会報告

森智香子(Pr 平 8)

3月22日、約2年半ぶりに中部支部の総会・懇親会を名古屋の中日パレスで開催した。

今回の総会では、新支部長を擁立し、事務局もより強化するという「新生・中部支部」発足の会でもあり、春の雨の中、およそ40名の会員が参加した。また、亀山学長をはじめ来賓5名の方(アラムナイ事業室長浦田先生、上原外語会理事長、新田外語会支部委員長、門馬関西支部代表幹事)にもご参加いただき新しい中部支部を印象付ける盛大な会となった。はじめに、大原侠(M昭 36)代表幹事より黒田清彦(S昭 42)新支部長の紹介があり、新支部長の挨拶の後、浦田先生より大学の近況報告、上原外語会理事長より外語会体制の説明と支部への期待を含めた挨拶をいただいた。その後、亀山学長の1時間に及ぶ記念講演「ドストエフスキーの現代性—『罪と罰』と『カラマーゾフの兄弟』」があった。テキストに入り込むという翻訳の極意やドストエフスキーのエッセンスをちりばめながら、ご自身の経験や身近な話題をお話されるなど、わかりやすく、面白い講演に会員一同魅了された。続いて、パーティー会場に移動し、犬飼通之様(E昭 29)の乾杯の音頭の後、約2時間にわたって懇親会を行った。20代から80代の会員たちは思い思いに話の花を咲かせ、母校という強い絆のもとネットワークをひろげたようだった。関西支部代表幹事の門馬様的一本中締めの後、場所を変えお酒を変え(?)懇談は続いた。

また、懇親会では新幹事団の紹介と挨拶もあった。詳細は以下のとおり。

支部長：黒田清彦(S昭 42)、代表幹事：津谷優(S昭 42)、副代表幹事：齋藤秀明(R昭 54)、また20代~30代の若い幹事団も10名ほど選出。幹事団一団となり、今後も活動を活発化させ交流を深める予定です。次回は、来年のビールがおいしく飲める頃(?)に開催予定。乞うご期待! ご関心をお持ちの方は、津谷優 mtsuya@sf.commufa.jp、齋藤秀明 sthdk@mx5.suisui-w.ne.jp にお問い合わせください。一人でも多くの方の参加を期待します。



恩師をお迎えしてアモイ支部会開催

秋保哲 (C昭 56)

昨年10月9日、ミレニウムハーバービューホテル・アモイにある中国料理「龍苑」において、第8回アモイ支部会が開催されました。今回は総勢13名と今までで最大規模の会になりました。アモイは5月に引き続き千客万来で、今回は、現在は悠々自適の生活をされている沓掛良彦先生(外語名誉教授・和洋女子大客員教授、戯号・枯骨閑人)、現役の英米語科教授でいらっしやる荒このみ先生、そしてチェコ語科を卒業され現在武蔵大学准教授をお務めの阿部賢一先生をお迎えしての支部会になりました。今回の先生方のご訪問は、支部会メンバーでアモイ大学外文学院副教授の黄少光さんが外語の院生時代に沓掛先生の研究室でお世話になっており、そのご縁で実現したものです。3先生は、まずは福州大学(アモイが属する福建省の省都福州市にある名門大学)での講演というお役目を終えられ、アモイにお戻りになり大変ラッ

クスした雰囲気での外語会参加となりました。また、今回は、外語にも留学の経験がある福州大学外国語学院副教授の潘秀蓉さんも2名の学生さんをお連れになり、特別ゲストとして参加されました。

当日の話題は大変豊富で、沓掛先生が学生時代（早稲田・露文）からどのようなことに興味を持たれ、どのような経緯で外語に移られたかというお話、同先生の外語学生部長時代のお話や今の外語に関する感想、外語時代にお酒の好きな方々が「バー沓掛」に集ったお話、おりしもアメリカ大統領選挙の予備選挙が行われていたこともあり、荒先生が大変興味を持たれていたオバマ候補（現大統領）のお話、外語の教授から初めてのケースとして駐フランス日本大使館公使になられた渡邊啓貴先生のお話やら、大変多彩な話題に花を咲かせました。また、先生方から、海鮮が多く味が淡白なアモイの料理（アモイ風北京ダックも含め）に対してお褒めの言葉を頂きました。そのような流れの中、青島ビールや紹興酒もどんどん進んでいきました。沓掛先生はお酒の量をややセーブされているとのことでしたが、この日だけは例外になってしまいました。

沓掛先生はご専門の西洋古典の素地を踏まえつつ中国の飲酒詩をわかり易く解説された『壺中天酔歩』（大修館書店・2002年）を、荒先生はご専門の立場から戦後のアメリカで一世を風靡したジョセフィン・ペーカーの一代記である『歌姫あるいは闘士ジョセフィン・ペーカー』（講談社2007年）を近年上梓されていますが、実際に目の前でいろいろなお話をお伺いして改めてお二方の学問に対する衰えぬパワーを感じました。

先生方にはアモイの知名度アップの為に日本での宣伝をお願い致しましたが、後日、荒先生から、外語の授業で早速アモイを紹介されたとのこと連絡を頂き、大変ありがたく嬉しい思いでした。今後も沢山の外語関係者の方々がアモイにお越しになり、当地をご覧頂ければと期待しております。特に学部の方々には、非常に環境のよい提携校であるアモイ大学への留学を強くお勧めしたいと思っております。アモイ支部一同、

皆首を長くしてお待ちしております。



前列左より、潘さん、沓掛先生、筆者、荒先生、阿部先生
後列左より二人目、三人目が野平夫妻、六人目が黄さん（支部会員のみ紹介）

マニラ支部

三木朝子（R昭55）

2月24日の晩、マニラ支部の臨時支部会がちょっとお洒落なフィリピン料理レストラン「セントロ」で行われました。しばらく休会状態だったマニラ支部は昨年2月活動を再開し、大阪外語大との合同の会合も行っています。今回は93年から4年間マニラに駐在され、現在フィリピン協会評議員の川津泰人様（I昭43）が日比経済合同会議参加の為、来比されたのを機に開かれました。折しも昨年、当支部の活動再開にご尽力下さった野村愛さん（Ph平13）もマニラにご出張とのことで8名が集まりました。

マニラ支部の大御所、在比数十年の斉藤勝春様（S昭43）はいつも座の中心ですが、川津様と同期の卒業であることが分かり大いに意気投合されていました。退職後は歌を中心に生活しておられるという川津様は4つの合唱団に所属とのこと。マニラ日本人会で女声合唱に携わっている私には興味深い「声の出し方、お酒と歌」といったお話も伺うことができました。また昨年フランス語検定に合格されたそうで、それには草田光逸様（F昭50）も感心され、話はそこから外国語あれこれ、梨本博様（Pr平1）のペルシア語、アラビア語入門講座へと移っていきました。こういう展開はいかにも外語大卒業生の集まりらしく面白かったです。

またこの日はアテネオ大学大学院をめでたく修了されバンコクへ向かわれる岩崎さん（Ph平17）の壮行会も兼ねました。東南アジア漁業

開発センターに入社されるという話に、なんと吉海江嬢様（C昭56）が水産の専門家ということがわかり、魚でまたひとしきり盛り上がりました。どこでどんな情報が得られるかわかりませんね。やはり繋がりは大事にしないでと改めて思いました。メーリングリストを作っているいろいろな情報交換に役立ててはという提案も出ました。野村さんは今話題の渡日するフィリピン人介護士のための日本語教育の準備に追われているそうです。フィリピン人は優しく面倒見がよいのでお年寄りの介護には適性があると強調されていましたが私もそう思います。「最近ではひと昔前と違いこちらで仕事をしている若い女性の外語会員が増えました」とは齊藤様のお言葉ですが、彼女達の姿はとても素敵でただの専業主婦の私には眩しく輝いて見えました。残念ながら私は4月1日付で主人の帰任が決まり日本へ帰国することになりました。皆様有難うございました。また、マニラに来ることがあれば支部会を開いてもらおうかしら？



第13回東京外語会ツアー交歓会がカイロで行われる

若林利昭（Pr 平12）

去る3月12日に、エジプトのフォーシーズンズホテルギザにおいて、富盛先生（F昭45、現東京外国語大学国際戦略本部所属）、『東京外語会ツアー「悠久の大地」エジプトへ』の参加メンバー、在カイロの東京・大阪外語会メンバー及び両大学の留学生、カイロ大学関係者など約50名が集い、交歓会が催されました。

当日は、カイロ支部会長の安藤さん（E昭48）、

ツアー団長の田中さん（M昭37）のご挨拶、富盛先生より外語大の進捗などについてご報告を頂いた後、大阪外大出身の友金さん（インド語昭35）より乾杯のご発声がありました。

歓談中には、ツアーのメンバーと在カイロのメンバーの紹介がそれぞれ行われ、新旧OB/OGが入り混じった各テーブルでは、笑いの絶えない時間が続きました。また、以前東京外大でアラビア語科を担当されていたサルワ先生や、現在東京外大のアラビア語科を担当され、今回日本から来埃されたハナーン先生との久しぶりの再会を喜び合う、アラビア語科OB/OGの姿も見られました。

会の終盤には、カイロ支部幹事の谷生さん（D平10）より、交歓会参加者の舌を唸らせた（？）エジプト産のビールとワインに係る、歴史や銘柄などの紹介が行われ参加者の関心を引き、盛り上がったまま、後ろ髪を引かれる思いで会は終了しました。

古代遺跡、砂漠、ダイビングスポットを有する海外リゾートなど、エジプトは巨大な観光資源に恵まれており、08年は1,300万人の観光客が訪れました。夏も気温が高い割には、湿度が低く、日陰や夜になれば涼しさも感じます。これから、暑い夏の季節が訪れますが、ビール発祥の地エジプトは、皆さんのご来訪をお待ちしています。乾いた喉をビールが癒し、最高の時間と思い出をプレゼントすること間違い無しです。



新田外語会支部委員長が上原理事長のメッセージを代読。新田委員長の写真右側にカイロ支部加藤副会長、安藤会長（着席）。後方に若林副幹事、谷生幹事